

そこにはなんの負担もかからない

物事を記憶するには、第一に“関心”第二に“反復”が必要です。とりわけ“関心”は、記憶のための絶対必要条件です。“心ここにあらざれば見れども見えず、聞けども聞こえず”で、関心のないことは、いくら反復して見せ、聞かせたところで、心の目、心の耳が見聞きしていないのですから、記憶されるはずがありません。

人の顔でも、関心のない人の顔は、何回会っても記憶に残りませんが、強く関心を持って見た人の顔は、たった一度だけの経験でも、心に強く印象づけられて記憶に残ります。

しかし、どんなに強い関心を持って、心に印象づけられ記憶されても、ただそれだけで二度と経験することがなければ、その記憶はだんだん薄れていきます。

したがって、記憶を必要とする学習では、まず、記憶すべき物事に、子どもの関心を持たせるように仕向ける(その方法はあとに出てきますが)ことが第一で、第二には、その記憶を保たせるために、反復して経験させることが必要です。

一般に、記憶できたと思うと、途端に反復をやめてしまいがちです。

しかし、反復は、記憶するためにも必要ですが、それ以上に、その記憶を保持するために必要なのです。

今の脳生理学では、三歳ごろまでの幼児の脳は、おとなの脳よりも強い吸収力がある、と考えられています。ただ、その吸収力は、耳目に触れるものを、なんでも覚え込むというもので、取捨選択して覚えるという働きはありません。

つまり、“理解して覚える”という働きは、三歳ごろから後に、だんだんと発達していく能力なのです。“理解して覚える”ということは、裏返せば“理解できないと覚えられない”ということですから、何でも吸収するという覚え方は、四歳ごろまでが絶頂で、あとは次第に衰えていくと考えられます。

ですから、日常生活を成り立たせる“言葉”や、それに関連のある“文字”などは、“理解して覚える”段階にはいるまえの、何でもかんでも吸収する幼児期に、できるだけ覚えさせた方がよいのです。

幼児が何の努力もせず、負担も感じないで、つまり“内なる力”によって覚える時期に、多くの言葉や文字を覚えさせることは、幼児のその後の生活に非常に役立ち、知的発達の上に著しい効果を発揮します。